津別町長
佐藤多一

脱皮する巳年に

町民の皆様、新年明けましておめでとうございます。輝かしい令和7年の新春を穏やかにお迎えのこととお喜び申し上げます。

いま、世界に目を向けますと戦火は止むことなく、むしろ拡大の一途を辿っています。一旦戦争が起こると人間の命ははかなく、個人の力ではコントロール不能になってしまいます。国家の命により、兵士となって戦地に赴くと生還の保障など全くなく、また戦況によって被害は非戦闘員へ及んでいきます。このような状態に引きずり込まれることのないよう、一刻も早く平和な世界を取り戻すべく国において尽力してほしいと強く願うばかりです。

さて、津別町はこれからも町として存続できるよう、まちなかを再生する事業を続けています。昨年11月にはサッポロドラッグストアーをメインに、北海道つべつまちづくり株式会社事務所や移住・定住相談コーナーなどを複合した「幸町棟」がオープンしました。これにより、計画上8つのゾーンの一つであるコミュニティゾーンの整備は、町民サービスゾーンに続きすべて完了しました。

まちなか再生基本計画の策定にあたり実施した住民アンケート調査では、津別町に欲しいものの一番はドラッグストアーで、二番がスーパー、三番がホームセンターでした。実際にはその逆から一つひとつ整備されていきました。2階の町長室からコミュニティゾーンの建設状況を毎日眺めていましたが、ようやく町民の皆様の希望の一つであった買い物環境の整備を終え、達成感を感じているところです。

昨年10月、札幌の病院に入院しましたが、持ち込んだ小型ラジオで何局ものFM放送をクリアーに聞くことができました。うらやましいと思いました。AMを含め津別町のラジオの電波状態は極めて悪く、これを改善するには多額の費用を要します。一方、人口の多い地域では放送会社自身が整備しますが、津別町のような山間の条件不利地では採算性から町が自前で整備しなければなりません。日本国民という立場で考えると何とも不公平に思います。

人口減少の理由を一言で言うなら、やはり「住みづらい」ということだと思います。戸籍係で転出される方に任意で理由を聞いていますが、医療、教育なども大きな要素になっていて、人によっては幾つもが複雑に絡んでいます。そうしたことが「住みづらさ」となり、少しでも問題解決できる地へと、ある人は積極的に、ある人はやむを得ず転出していく傾向にあります。

昨年は、商工会の協力を得て「若者就職者等の交流を促進するつどい」を開催しました。せっかく津別町に就職しても友達ができずに、町を去ってしまったケースが見られたため、津別町に転入してきた若者が顔見知りになる機会を企画しました。つどいには30人を超える若者たちが参加し、その後自主的に二次会へと流れていったと聞きました。毎年こうした取組を続け、やがて津別町の町民として積極的にまちづくりに関わってくれることを期待したいと思います。

昨年は辰年ということで経済の飛躍的な成長を期待したのですが、残念ながら昇り竜となったのは物価でした。今年は巳年です。これまでの状況から脱皮し「復活と再生」に向かう年であって欲しいと願っています。

結びに、町民の皆様にとりまして、本年が希望の持てる年となりますようご祈念申し上げ、年頭のご挨拶といたします。

津別町議会議長
鹿中順一

津別町が今後も輝き続けるために

新年明けましておめでとうございます。町民の皆さまには、輝かしい新春をお迎えのことと心からお慶びを申し上げます。

昨年は、能登半島で発生した地震による目を疑うような光景ではじまりました。

被災地にお住いの方々の安否や、その後の生活基盤の復興が遅々として進まないことに対して、我がことのように被災者の惨状に思いを寄せられた皆さまも多かったことでしょう。

その一方で、私たちが暮らす津別町の災害対策は果たして万全なのかと、深く考えさせられた一年でもありました。

天災に対する備えに万全ということは不可能に近いのが現実ではありますが、皆さまが安心して暮らせる津別町であるために全力で取り組むことは、議会議員として重要な責務であることを今一度認識し、その責任の重さを実感した出来事でありました。

昨年の津別町の明るい出来事についてでありますが、5年ぶりにふるさとまつりが再開されましたが、このことは、女性団体や青年団体の皆さまと議会議員との間で行われた意見交換会でも多くの要望が出されておりましたことから、われわれ議員も復活に向け、一町民として自分たちに出来ることについて積極的に取り組みました。

結果として、多くの町民の皆さまのご賛同と、子供たちの期待に後押しされながら、先人たちから守り継いできたこのイベントを復活させる取り組みに、微力ながらもかかわることができたことは、私たち町議会議員にとっても大きな喜びとなったところであり、今後に向けての一つの励みにもなったところであります。

こうして、町民手作りの露店には子供たちの笑顔と歓声が戻り、新型コロナ禍以前の賑わいを取り戻したふるさとまつりの2日間でありましたが、以前とは異なり御神輿の担ぎ手の中に、多くの津別高校生たちの姿がありました。

地元のイベントを盛り上げようと、観客の声援の中を、肩に重たい神輿を乗せ、掛け声とともに一歩一歩踏みしめるその姿は逞しく、津別の明るい未来の象徴のように感じるとともに、やはり津別高校は、このまちに欠かすことのできない学校であることを再認識させられたところであります。

ここ数年は、役場や消防庁舎が生まれ変わり、新しいまちの目玉となるコミュニティ施設が大通と幸町に誕生し、給食センターも本年の竣工を目指し建設作業の最中であります。また、農協の事務所をはじめ、民間施設も新たに整備されるなど、市街地の景色は、ここ数年で大きく様変わりしています。

加えて、昨年秋には屈斜路カルデラトレイルが開通したこともあり、新たな観光客層を迎え入れる準備も整いました。

このように変革期を迎えている津別町でありますが、伝統や老舗の魅力を引き出しつつ、新しく出来た資産を将来に向けてより一層活用するためにも、今後の津別町をけん引するであろう若者たちに、この町の将来像について積極的に考えてもらえることを期待するところであります。

そのためにも、かつて自分たちの世代が、職業や立場の垣根を越えて将来の津別町について語り合った「町おこし大学」のようなものが、令和のこの時代に、若者たちの意思でもう一度開かれることを切に望み、今度は我々の世代が、その立ち上げのお手伝いをできる立場になれることを今年の目標の一つに据えて、議会活動に全力を挙げて取り組もうと心を新たにするところであります。

今後も、皆さまにとって住みよい津別町であり続けるために、町民の皆さまの貴重なご意見を町政に反映できるよう、議会としての責任と役割を果たしていく所存であります。

結びになりますが、本年が町民の皆さまにとって明るく希望ある一年となりますとともに、皆さま方のご健勝とご多幸を心からご祈念申し上げまして、年頭のご挨拶といたします。